
茗荷

花村かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茗荷

【Zコード】

N71111Y

【作者名】

花村かおり

【あらすじ】

本当の恋をしたことがない25歳の女性が、大人の恋に飛び込んでいく

その日は秋の長雨が終わり、天気の良い日だった。直子が勤める会計事務所は少し古いビルにあり、エアコン配備されているものの、ビルの設計が悪いのか、室内は少し汗ばむくらいであったが、直子は淡々と仕事を進めていた。

公認会計士の先生が1名、従業員4名、パートさんが3名の小さな事務所ではあるが、それぞれが担当毎に仕事を上手く回し、また人間関係もとても良かつたこともあり、直子にとつては居心地の良い職場だった。直子は大学で会計を学び、公認会計士の第1段階となる試験は合格しており、この事務所で実務を経験しながら、残りの試験に合格して、ゆくゆくは公認会計士になり、独立などを考えていたが、居心地の良さに、ずっとこのまま補助者でも良いと思つてしまつ。

年度末調整の時期は、ものすごく忙しくなるが、それ以外は残業も少なく、自分の時間もとれた。その日も定時を少し過ぎると、次々と社員が「おつかれさまです」と声をかけて帰つていつた。直子もそれに違わず、挨拶をして事務所を出た。

事務所は直子の自宅から1駅ほど場所にある。晴れた日は1駅、30分ほど歩いて帰ることが多かつた。その日も天気のよさにつられて、30分歩いて家路についた。

直子の自宅は閑静な住宅街であったが、その中にぽつんと理容店と日本料理屋が2店並んで、商売を営んでいる。直子の家はその「ぽつん」の1つの理容店であった。日本料理屋は1つ小さな道を挟んで向かい側にあつた。

家に帰ると両親が数名のお客の対応をしていた。お店は8時まで営業していたから、夕飯は直子が作ることが多かつた。

昼間に母親が買つてきた食材を利用して、簡単なおかずを作つて、食卓に並べるとその日の仕事が終わつたような気がした。本来なら

ば、両親の仕事が終わるのを待つて、一緒に食事をするのだが、その日はその気にならず、一人先に夕飯を済ませ、自分の部屋に戻つた。

直子にはつい最近まで恋人がいた。大学時代の一期先輩で、テニスサークルで知り合つた。大学時代から付き合つていたのではない。卒業してから、OB会で再開し、自然の流れで付き合うようになつた。特にお互い猛烈に好きだつたという訳でもなかつた。でも、お互い気が合う相手だつたし、付き合つている間は楽しかつた。しかし、別れる数ヶ月前から詳しいことは良く分からぬが、会社の経営が危うくなり、彼も仕事に付き合つ切りになつっていた。一週間に一度ぐらいは時間を作つて、会うようにしてはいたが、それもままならなくなつた。直子が心配してメールをしても、返信はほとんどなくなつた。今年の夏の終わりに「私のこと忘れちゃつたのかな?会いたくないのかな?」というようなメールを送つた。それから、何度もメールを送つても、返信が来なくなつた。病気でもしていなかと、心配になつて、昨夜、携帯に電話をしてみたら、着信拒否となつていた。そのとき、捨てられたのだと認識した。こんなこと生まれて初めてだつた。

なんで捨てられたのか分からぬ。でも、受け止めるしかないのだ。よくよく考えてみれば、彼の外見も性格も好きではなかつたような気がする。彼のことを本当に愛していなかつたのだと思つた。悲しくもなんともなかつた。ただ、彼が不誠実であることに失望した。こんな風に簡単に捨てられてしまう自分が惨めになつた。

「まあ、こんなこともある。考へても仕方ない」と声を出していつた。

すると母親が私の部屋に入つてきた。

「直ちゃん、もう寝ちゃつたの?」

「寝る訳ないじゃない、まだ8時前だよ」

「だつてご飯先に食べちゃつたみたいだから」

「ああ…、ちよつと、勉強しようと思つて」

その割には参考書もノートも広げていらないのを母親は気づいてか、「あら、そうなの。勉強中悪いけど、笠屋さんに茗荷、分けてもらつてきてほしいの。お父さんがどうしても冷奴の薬味に食べたいんだって」と言った。

「うーん。わかつたよ」と私はしづしづ椅子から立ち上つて寿屋に向かつた。寿屋は向かいの日本料理屋さんのことである。寿屋の裏庭では、この時期になると茗荷が自然に生えてくるのである。

私は道を横断して寿屋の勝手口に向かつた。

とんとんとドアをたたいて「すみません」と軽をかけぬと「あこよ」と威勢の良い女将さんの声が聞こえてきた。

寿屋は料亭のような品の高級料理をメインに固定客を抱えていて、景気も良いみたいだつた。中からはお客さんとの笑い声が聞こえていた。

「あら、直子ちゃん、今日はどうしたの。」

「すみません、父が鎌谷さんの薺荷がほしうつていつもど、分けてもらえませんか?」

「いいわよ、芳夫さんは薺荷が好きだものね。ねえ、誠一さん、庭から薺荷とつてきてあげてよ。」と女将さんは言った。

誠一さんはこの料理屋の板前さんである。板前らしく、白い帽子と衣装を身につけていた。髪の毛も短く、皆が抱く板前さんの典型的よつな清潔さを持っていた。

「ええ、いいですよ」と言ひてので、

「私も一緒に取りに行きます」と誠一さんについて行つた。

当初はその前は女将さんと旦那さんの二人で切り盛りしていたが、誠一さんは直子が高校生のころ、この店にやつってきた。神楽坂の有名な料亭で働いていたのをやめて、この料理店に勤めるようになつたと聞いていた。誠一さんが勤めるよつになつてから、料理店は繁盛するよつになつたよつに思える。年に何回か家族で食事に行くこどがあるが、誠一さんが作つた料理は全て、美味しかつた。女将さんも旦那さんも誠一さんのことを見つめていた。

裏庭で誠一さんは薺荷を見繕つて、4束摘み取つて直子に見せた。

「お父さんはこれで満足かな」

「ええ、こんなにいただければ大満足です。ありがとうございます」と答えた。

誠一さんは妙な色氣がある、飾らない板前さんの格好で、年も4

〇は週末でこるだらうて、一晩、一晩に色気を感じた。

「じいの名荷は毎年生える場所が変わるんだぜ、去年はあつて、今年はいこに生えてる。まるで意思をもつてこつだね」

「なんですか?」

「やう、不思議だろ」

「不思議ですね」

「やうこやわあ…」

「直ちゃん、いくつになつたんだい」

「今年で25になりますよ」

「やうかあ、どうりで綺麗になるはずだ」

直子は誠一さんにそんなことを言われて、心臓がドンッとなつて何も言えなかつた。誠一さんは、そんな直子をじつと見つめている。しばらく経つて、「お世辞ありがとう」やこあす。」と私は言つた。「いや、お世辞じゃないよ。それに直ちゃんは頑張りやだからね、公認会計士になりたいんだ。おれそれ聞いたとき驚いたよ。」「でも、なりたいだけで、なれるかどうかは難しいんです。」「いや、直ちゃんだったら、できそうだよ。意思が強そうなあ。」「いえ、でも難しいですよ。」

「あはは、とにかく頑張つてよ。」と言つて、はい、と言つて、家に戻つた。

心臓がまだじきじきしていた。誠一さんと話すといつも、やうだ。でも誠一さんにとっては私なんて小娘で相手になんてしてくれないだろうと直子は思つていた。それに誠一さんは恋人がいるようだ、時々店にも顔をだしていた。清潔そうな誠一さんと対照的に、派手な水商売系の匂いのする女人だつた。

家に帰ると「お母さん、もらつてきたよ」と台所にぽんと名荷を置いて、自分の部屋に戻つた。心臓のじきじきせしまりく取まらなかつた。

その日、直子は午後に休暇をもらひて、午前中の業務を終わらせて、あわてて事務所をでた。離れて暮している5歳年上の兄から連絡があり、会いたいと言われたからだ。

寿屋の前を通りると誠一さんが女人の人と談笑をしていた。直子は軽く会釈をして通り過ぎようとしている。

「直ちゃん、お帰り、今日は早いんだね」と誠一さんが声をかけてきた。

「ええ、今日は兄と約束をしてるので、無理を言つて、休みをもらつたんです。」

「へえ、隆と会うのか、元氣しているかな? よろしく言つておいて「誠一さんは言つた。」

「はい、伝えておきます」と言つて、誠一さんが女人の人と一緒にだつたから、なんとなく会話をするのがばかられたため、では、と言つて急いで家に向かつた。

家に着くと畠や、母が、

「直ちゃん、今日は早いじゃない、どうしたの?」

「ちょっと、友達と会う約束をしていてね、午後お休みをもらつたの。」

「へえ、いいわねえ」と母は言つて、仕事に戻つていった。両親に兄の隆と会うことは伝えられなかつた。

兄は5年前に家を出ていた。兄には近所に幼馴染の婚約者が居た。しかし、結婚式をどうするか決める段階になつて、突然、婚約者と別れてしまつたのだった。

それと同時に兄は家を出た。母は

「何も家を出なくてもいいじゃない」と言つた。兄はそのひる、実家の理容店で理容師として働いていたからだ。

「美希に申し訳ない。俺にはもう会いたくないだらうしや」と言つた。

て、さつさと別の理容店に就職を決め、家を出て行った。それからは年に1度ぐらいしか実家には戻つてこない。

兄は直子だけに道ならぬ恋をしたと告白をした。好きになつてはいけない既婚者の女性を好きになつてしまつたということだった。相手も自分のことを好きでいてくれる。こんな気持ちになつたのは初めてなんだよ、と言つた。

直子は着替えてから、急いで家をでた。誠一さんはまだ通りに居て店の周りをぼうつきで丹念に掃いていた。もう女人人は居なくなっていた。

「今日はお店お休みなはずなのに、どうしたんですか?」と私は尋ねてみた。

「今日はね、旦那さんと女将さんが法事でいないんだよ。だけど、明日、大事なお客様が来るんでね、仕込みをしに来ていたんだ」と誠一さんは答えた。

「隆さんに会うんだり、彼女と上手くやつていているのかね」兄は誠一さんを兄のように慕っていたから、女性関係のことも相談していたようだ。

「私も最近のことば良くわからないんです。だから、今日聞いてこよつと思って」

「もうだな…。たまには俺のとこにも顔を出せと伝えておいてくれよな」

「ええ、もちろん」

そう答えて、兄が待つ場所に向かつた。

兄は駅前の古びた喫茶店で待つていた。

「直子、久しぶり、元気にしていたか?」

「お兄ちゃん、元気にしていたけど、突然どうしたの?心配したよ。しかも、家には帰らないで、別の場所で話そうなんて」

「いやや、家にかえると母さんが戻つて、理容店を継げつて、いるさいだろ、だからさ」

「まあ、ただけど」

「美希は元気にしているかい?」と兄はかつての婚約者のことを聞いた。

「美希さんは…、昨年、近所のおばさんのつてでお見合いをして、

結婚したわ」となんとなく伝えづらこ」とだったが、正直に言った。

「そうか、美希は幸せになつたんだな」

「ええ、来年には赤ちゃんも生まれるんだって」

「そうか」と兄は言つとタバコを一服した。

「ああ、それと寿屋の誠一さん、たまには俺のところにも顔を出せつて言つていたよ」

「誠一さんかあ、懐かしいなあ、元氣かい」

「うん、元氣そうにしているよ」

「そうかあ」と言つとふうつとため息をついた。

「ねえ、お兄ちゃんは女人と上手くやつているの?前、話してくれた

「そうねえ、上手くは行つていな」

「なんで」

「相手は所帯持ちで離婚はできな」つて最近になつて言い始めたんだ

「でも、最初は離婚してお兄ちゃんと一緒になりたいつて言つていいだ

「そうだつたなあ、でも婚姻関係を解消するのは難しいらしいんだ。たらしいじゃない」

「相手がうんと言わないし、慰謝料とも請求されているんだ」

「じゃあ、慰謝料を払えばいいんじやない」

「まあ、そうだな。でも、ホントは田那との安定した生活を壊したくないんじやないか?」

「でも、そしたら、お兄ちゃんと続けるのもおかしいじやない」

「確かにそうだ、でも、もう離れられなくなつてしまつてね」

直子は少し黙つた。直子は兄のように恋に燃え上がつたことがないから、実感がわかぬ。

「直子…、直子はどうすべきだと思うかい?」と尋ねてきた。

「私は、そんな人と別れて、また新しく生活を始めるべきだと思うわ。もう美希さんも幸せになつたんだもの。うちに戻つて、働いてもいいじゃない」

「そういう考え方もあるかねえ。近所では俺は悪者だぜ、結婚間近で女を捨てたひどい男」と兄は遠くを見ながら言っていた。

「そんなの、昔の話よ」

「いや、そういう噂はなかなか消えないんだ。女も寄つてこない女が寄つてこなくてもいいじゃない…」と言い掛けたが辞めた。

「いやや、今日は、直子に話を聞いてもらいたかったんだ。仕事お休みをせて、ごめんな」

「いいよ、今は忙しい時期じゃないんだし」

兄はこれからどうするつもりだろう。少し心配になつた。

私も彼に振られたんだよ、とかそういうことも話したかったけど、話す気になれなかつた。直子の失恋と兄の恋愛とは重みが雲泥の差で違ひすぎるのだ。

話が済んだのか、兄はお会計をしようと言つて、店をでた。

「今日は、ありがとう。また、電話するよ、誠一さんによろしく伝えておいてくれ」と言つて駅に向かつていつていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7111y/>

茗荷

2011年11月23日20時48分発行